

振り子と占い棒の謎を解く 1991年 ビジネス社

ゲオルク・キルヒナー

機械工見習いのとき第2次世界大戦で兵役につき、ロシアで捕虜となる。精密機械工学でマイスターの資格をとり、キルヒナー・ウント・ヴィルヘルム商会を継ぐ。この会社は自然療法関係の器具を製造販売しており、祖父から3代続いて1990年は創業100年にあたる。家族を襲った悲劇から、人間が晒されていて病原となる放射線に注意を促したい一心で本書を著した。

すべてのものは振動している

(1) 警察よりも頼れる男

スイスのテッシン州警察が万策尽き、捜査もすべて水泡に帰してしまったときでも、力を貸してくれる人が1人だけいる。ミヌシオの振り子探知者リッカルド・ボネットィという男だ。マルタ・Wという婦人の場合がやはりそうだった。

ポンテ・テレサのエミリオ・Wは、行方不明となった妻マルタを、警察に頼んで1週間以上も捜した。しかし、無駄だった。エミリオと親戚の人たちは、すでに最悪の事態を考えていた。マルタはたびたび鬱病の発作に苦しんでいたからである。妻のことはもう諦めようとしたとき、エミリオはふとボネットィのことを思い出した。彼は妻のパスポート写真を持って、ボネットィを訪ねた。透視者にして放射感知者であるボネットィは、振り子とテッシン州の地図を取り出してきた。それから精神統一をし、左手の指で写真を地図の上に押しつけ、右手の振り子を旋回させてやると、振り子はルガノ市の郊外、アグノの方角にある1軒の家を指した。通報を受けた警察は間もなく、地図の上に印をつけられたその場所に、捜していた婦人を発見したのである。

ある酔っぱらいの場合も同様で、州警察は長いことその酔っぱらいを捜索していた。ボネットィはその死人が横たわっているマジョーレ湖の地図上の場所に印をつけたが、死体はまさにその場所に隠されていたのだった。

あるいはまた、カノッビオの23歳のジュゼッペの場合、最初のうち人々は、彼がこっそりとフランスへ出国したものとばかり思っていた。彼の姿が見えなくなつて16日後に人々がボネットィのところへ行くと、「ジュゼッペは当地カノッビオのすぐ近くの山の上にいる——死んでます!」と明言するのだった。山にのぼってみると、青年は見つかった。彼は、首をくくって死んでいたのである。

リッカルド・ボネットィは自分の能力のことをこう書いている——「人間の頭はラジオ放送局のようなものである。体はアンテナである。私が振り子に集中しているときは、振り子が受信アンテナで、私の頭は受信機となって、電波を解析しているにちがいない」と。

特に唖然とさせられるのは、彼を検査しようとしたドイツ人医師を相手にしたときの、ボネットィの体験である。テッシン州のこの振り子探知者は、そのときのことをこう語っている——「私は彼に言ってやったんです——あんたは奥さんに知られぬよ

うに、こっそりと私生児の息子さんに養育費を送っていますね、って。私に浮気をあばかれたときは、奴さん真っ青になりましたね。それ以来、彼は振り子の魔法を信じるようになったんです」。

この件についてスイスのジャーナリスト、ウルス・グラッシィが報じていることは、驚くべきことではあるが、決して説明のつかぬことではない。

(2) 名人も稽古次第

占い棒と振り子は何千年も昔から魔訣不思議な術の手段だった。20世紀には、占い棒は生体電気指示器に、振り子は深層心理学の科学的補助手段となったが、その20世紀においても、特に振り子の超心理学的特性は保持され、いっそうの発展を見てきた。振り子の助けを借りて、たくさんの驚くべき発見がなされてきたし、またなされるのである。

現代の放射感知術の代表者たち、振り子探知者と占い棒探知者の言ふことは、ますます真面目に受けとめられつつある。もっとも、いつもそうだったというわけではない。しかし、哲学者ショウベンハウアーの言葉を思い起こしてほしい。彼はこう言ったのである。

「いかなる問題も、それが承認されるまでには、3つの段階を経るものである。第1段階では笑止千万なものに見え、第2段階では攻撃され、第3段階にいたって自明的なものと見なされるようになる」

振り子探知者は「この宝石は本物か?」「この人は私に合っているか?」「行方不明者はどこにいるか? 彼は死んでいるのか、それとも生きているのか?」「どの器官が病気か?」といった質問に答えることができるのに対して、懷疑的な人は「振り子はなぜ振れるのか?」「占い棒はなぜ傾くのか?」と自問する。現代放射感知術の便覧であり、振り子と占い棒の歴史を資料で裏付ける本書は、こうした間に答えようとするものである。さらにこのハンドブックは、簡単な試みによって自分を敏感な者と認知し、振り子探知と占い棒探知の術を修練したいと思う人々のための指導書たらんともしている。

振り子探知に成功する人というのは、単に生まれつきというだけではなく、育成されもするのだ。生まれつきの才能もなく、不可思議な力に対する堅い信仰もなしでは、どんなに練習しても役立たず、また修練せずにはもてる能力も役立たない。名人も稽古次第という諺はこの領域でも言えることで、医学博士ゲオルク・ヤーコブはこう言っている。

「われわれは今日三次元の世界に住んでいる。いまわれわれの1人が頭を第四次元へ上げるなら、彼にとって世界は変貌をとげる。個人が頭をさらに高く第五次元へ上げることも全く可能である。そこで彼が体験することは、他の人々全員にとっては、まるで狂気じみたものである。

時空と空間に縛られておらず、その起源からして四次元ないし五次元的であるエネルギーは、科学的には証明できない。というのは、第4意識段階の科学は三次元的であって、これらの3つの次元のうちにおいてのみ、研究したり探求したりすることが

できるにすぎないからである。時間を第4の次元として加えることは虚構だと私は見なしている。なぜなら、第四次元が意識の構成要素に属しているような第5意識段階は超越論的であって、時間および空間を超克してしまっているからである。時間が超克されるところでは、時間は本質的な構成要素と見なされることはできない。

科学は、科学にとって探求できないこれらの諸力を単純に拒否するほど、愚ではない、それどころか、三次元において現れてくるそれらの諸力の作用を探求し、これらの不思議な力にとにかく名を与えようとしさえするのだ。われわれの今日の科学的世界像になじまないものはすべて『サイ-カ』と呼ばれるのである。

高次元エネルギーはHDエネルギーとも呼ばれる。われわれ今日の人間は3D次元から4Dや5Dで満足しなければならないが、その際でも、すでに第四次元は、科学的には捉えられずただただ、しかし絶対確かに、何とか感知できるだけなのである。これらの高次元は振り子探知と関係があるのだろうか？ 確実にある、と私は思っている。しかし、そこから1つの説明を固定化することは誤りだと思う。わかる者にはわかるし、わからぬ者は、説明してもしなくとも、拒否するものだ」

(3) 物のありかを探知する

振り子によるいわゆる性格探知という、むずかしくはあるが立証可能な課題に思い切って取りかかるのは、たいてい経験を積んだ振り子探知者だけで、彼らはしばしば十分驚くに足る成果を収めている。こうしてまた、例えば置き忘れた道具や書類の行方も突き止められるのである。

フランスの振り子探知者ル・ギャルは陸軍大佐だが、1947年10月、N男爵夫人の大変高価なアクセサリーのありかを突き止めた。そのとき彼は、まずヨーロッパ地図の上でフランスを、フランスの地図でリヨンの町を、それからリヨンの市街地図で2本の通りが交差している角の家を突き止めるというやり方をした。その家の正確な図面の上でアクセサリーは探知されたが、その場所はあとでアクセサリーが見つかった場所から30cmしか離れていたのである。

1944年、ピエール・トレッセルは関心を引く部隊の滞在を振り子で予知したが、それを1/50000の地図の上でやったのだった。彼は、その部隊の総兵員数のほか、物資や倉庫や砲台の集積場所、それに飛行場を、飛行機や輸送車両の数も含めて突き止めることができた。同じく、当該地域における道路交通の激しさ、街路や橋の状態から、迷彩を施された建物の状態にいたるまで突き止めた、と彼は述べている。

(4) 地球放射線の探知——交通事故の秘密——

振り子探知では、探知者が何よりも関わりあっているのは人間の個人的放射であるが、占い棒探知者は特に地球放射線(大地放射線)を探知する。例えばいくつかの幹線道路には死の床と恐れられている区間がある。オランダでの死の交差点として悪評の高い場所に——そこはもともと見通しもよく、そのため交通事故多発の合理的な原因是何も見つけることができなかった——オランダの運輸省が占い棒探知者たちを動員し

たところ、彼らはその場所に危険な地球放射線を突き止めることができたのである。

アウトバーン11号線のミュンヘンとモースブルク間では、18か月の間に27人の交通事故死が記録された。警察の見解では、これらの事故の大部分は見通しのよい区間での追い越しミスに起因したのだという。それは疑いもなく不十分な説明だった。なぜなら、事故にあったのは大部分がニーダーバイエルン行きの、この区間を知悉しているドライバーだったことを、統計が示しているからである。

フランクフルト—マンハイム間のアウトバーンの死の区間に関する興味がある調査が行われた。当時たえず増えつづける事故数は1957年にはほとんど1000件にも達したが、とりわけ地球放射線もその原因として初めて承認されたのである。死の区間とか死のkmということが話題になったのも、このときである。

このアウトバーン区間につきまとっている秘密を解く手がかりをつかむため、ヘッセン州の経済運輸大臣は、技師のフランツ・ビツル博士に交通科学的事故調査を委嘱した。こうして、この区間での1日当たりの車の数は21,400台になることが判明した。フランクフルト—マンハイム間は当時1kmごとに平均14件の交通事故を記録していた。

km区間地域510~520の事故多発地帯が特別調査の対象になった。この10km区間では、調査が行われた4年間で、計697件の事故が発生した。事故の多くは車線からそれたことと、ハンドルを取られて左右に振られたことによるというのが目についた。

ウィーン—ザルツブルク間のアウトバーンでの事故の起こりやすい場所でも、同じように地球放射線が事故原因と推定された。元化学者のルドルフ・ヴェンガーはその場所に金属製の輪を3本敷設させた。これについて占い棒探知者ヴェンガーは、輪が地球放射線を中和するだろうと説明した。リンツのアウトバーン管理事務所はヴェンガーの放射線封じを「これらの輪は悪くないようですよ」と認めた。

「私は占い棒を持ってその場所を回り、3本の地下水を発見した」とルドルフ・ヴェンガーは主張していた。「これらの水流は放射線を出していて、それらの放射線がドライバーの反応力に影響を与えていているのですが、ドライバーたちは気付かないでいる」というのがヴェンガーの意見だった。「私はそれらの放射線に特殊金属製の輪を取り付けてやったわけです」。

ヴェンガーの放射線輪が功を奏したのか、改修工事が行われたことによるのか—確かなことは、それ以来この真っすぐな道路区間では事故率の著しい減少が確認できたことである。

地球放射線の存在は、宇宙放射線の事実と同様、科学によって否認されない。地球は地磁気や電気的諸力によって囲繞されており、それらの力は物理学的装置で証明できるのである。地球放射線として特に水脈や鉱脈の上に集まっていて、健康に有害と認められている放射線で問題となるのは、おそらく電気に似てはいるが、電気と同じではない放射線である。

かたまって発生する地球放射線は、その圏内に生きている人間に病気や死を引き起こすことがあるようだ。死の道路もそれによって説明がつくかもしれない。ドライバーにとって死の区間とされるものは、太古の、地球放射線にさらされてきた刺激帶—こうした刺激帶は、かつては獣道・踏みならされて自然にできた道・狭い山道(馬道)として、植物群がもっとも少ないところだった—が入れかわるところを走って

いるのではなかろうか?

いつも同じ場所で繰り返し起こる交通事故の秘密は、ドライバーの反応能力が放射線によって鈍ることにあるらしい。「アウトバーン催眠における幻覚について」のアンケートに協力したドライバーのほぼ60%の人たちの報告によると、彼らはそのときただ幻覚のうちにだけ現れる障害物に反応していたようだ、この状態では、もしも同乗者が警告してくれなかつたら、本物の障害物のほうは見落としていたことだろうという。

「アウトバーン催眠」の原因はまだ正確には究明されていない。しかし、事故が頻発する特定の死の区間では、他の影響に加えて、地球から出る放射線がドライバーの集中力と反応力を鈍らせるることは、少なくとも考えられることではある。

(5) 地球放射線が健康に与える影響

道路交通における死亡事故のほかに、統計的に確かめられている「癌の家」も、おそらく放射線が原因となっている現象に属している。この種の家にたび重なる死亡原因は、癌なのである。

ハイデルベルク大学のフリッツ・ハーン教授は、例えば電場の圧力の急激な低下、とりわけ地球内部から出る放射能性放射線によって引き起こされる急激な低下は、循環を停止させることさえあるのを確認した。

ミュンヘンの科学者で、哲学と医学の博士でもあるJ.ヴェストは、地球放射線の研究に偉大な貢献をした。何年もの研究と実験の末、彼は地球放射線の像をグラフで記録できるような装置と計測器を組み立てることに成功した。こうした実験の際に明らかになったことは、放射線は木やセメントの床によっては吸収できないということである。もっとも、金属だと幾分かは遮蔽に成功する。

地下水脈、水脈や鉱脈の交差、地下の空洞や断層といったものは、特に度の高い放射線を生じさせる。これはとりわけガイガーチェンジ管でも確認される。最近の何年、何十年間に集められた資料から、放射線を強く浴びている寝所・仕事場・住居はほとんどすべての人間にひどい健康障害を引き起こすことがあるということ、これはもはや疑問の余地がない。放射線を受けている家畜小屋では、そこに入れられている動物は病気になり、戸外では植物の生育が妨げられるのである。石油鉱脈や空洞脈の上でも放射線が突き止められた。その間また特に敏感な振り子探知者たちは、考古学者たちを助けて、埋もれていた住居や墓地等を首尾よく発見させてやることができたのである。

地球放射線が健康に与える影響はきわめて多様な形態をとるので、そのことだけからしても、それらが神経系には特に影響を及ぼすことが推定される。フォン・ゴンツェンバッハ教授は、勇敢にも土地の影響と病気の関連を認めることを支持した人だが、地球放射線との関連で植物性神経系の明確な障害について言及した。刺激地帯は、休息したり座っている人間、それゆえハンドルをにぎっているドライバーやベッドで眠っている人間に、もっとも強力に作用するのである。

地球放射線は動物界にも同様に作用する。ブタの場合、咳の原因は地球放射線の作用に帰せられるようである。一般に動物たちは——子供たちと同じように——できるなら、

地球放射線の刺激地帯を避ける。ウシやウマが家畜小屋の中で斜線方向に立っているのも、そうした回避行動と解することができる。例えばイヌたちは、人間がきちんと整えてやった寝所でも、それが自分たちに不利な場所にあると、近付かないものである。

歯科医学博士エルнст・ブッセは、生体マイクロ波が多数の不可思議現象を説明する鍵だと見なしている。スイスの雑誌『RGS』(第131号、1976年3~4月)に、彼はこう書いている。

「科学が何の説明も見いださなかった——なぜかといえば科学では計量したり測定したりできるものしか通用しないからである——多くの現象は、これまで空想の産物と見なされてきたが、どんなに小さな波長もいまや計測学的に検出したり、最近では自分で作り出すことができるようになってからは、こうした諸現象は説明がつくのである。

私はマイクロ波を波長0から1000分の1ミリまでとそれより上の電磁放射と解している。

いかなる生きものも各自特有の基本波長で振動している。この基本波長はもしかすると染色糸の長さに依存しているのかもしれない。ところが、なじみのない波長が有機体の中に侵入してくることが発病の原因となりうるわけで、しかも侵入してくる異質の波長から身体が自分を守れないと、必ず発病するのである。生きものの細胞の中に侵入してくるバクテリアやウィルスの作用はこのようにして説明されうるのであり、また移植された臓器がなじみのない波長の中で振動するときに見られる、臓器移植の際の反発過程も同様にして説明されうるのである」

医学博士でカッセル出身の衛生部中将アレクサンダー・ヘールマンは、『医学の進歩』誌の中で、このテーマについて次のように書いている。

「成長促進放射線は光と色のスケールでいえば赤外線から緑まで、成長阻止放射線は音のスケールでいえばそこからラジウム放射線まで達する。前者は波動数18から1000に、後者はそこから超音波にまで及ぶ」

超音波についてはその間、次のとこと、すなわち超音波は種子の発芽を妨げ、動物では心臓を害するか、動物を殺し、また水と油をコロイド性結合に変えることができるといったことが知られた。音波や光や電気によって神経に影響を与えることができるという事実も、よく知られている。不協和音は人間に重い障害を引き起こすことさえある。生体マイクロ波を最初に医療に用いたブッセ博士は、さらにこう書いている。

「神経節とすべてに行きわたる回路網とをそなえた交感神経は、生命の統治者、心的なもの・意志・芸術的インスピレーション・心情・無意識といったものの操縦者であり、意識下の身体諸機能の指揮者であることが判明した。交感神経は、扁桃腺・副甲状腺・胸腺・肝臓・脾臓の助けを借りて、伝染病に対する保護柵をうみだすのである。それは希望・積極的暗示・信念・勇気によって強められ、希望を失ったり病気を恐れたりすることによって弱められ、弱まると共に身体の防御力も減少するのである。交感神経に障害がおこると、麻痺・痙攣・精神病・喘息・眼や耳の病、成長が押さえられたり不自然に成長したり、その他多くの病気にかかるようになる。交感神経の消耗の結果が老化なのである。

大宇宙の中の小宇宙——振り子探知の現象——

振り子は運動するとき、主として円と橈円を描いて振動する傾向を示す。——これは天の惑星に似ているが、他方、恒星は見かけ上まっすぐの道を走っているように見える。これに対し彗星は橈円半径が大きく異なっており、長く伸びた軌道を示す。これは次のことを意味する。惑星は完全であり、円を描いて振れる。まっすぐ走るものとしての恒星は不完全であり、古代的なのである。彗星は中間者と見なされる。

橈円と円軌道をともなう惑星と恒星の規則、振り子の公式と重力の公式、これらはみな普遍的役割を演じているπという数の偉大な秘密を指し示している。振り子は原則的に球の形態と円の機能を含んでいるので、この関係はいっそう明瞭となり、特にπ²と重力加速度gとの間には際立った類似性が見いだされるから、なおさらである。

ところで、母型としてこの超越的πのうちに球形と円形が含まれているからには、そのうちにはエーテルの構造の秘密も存しており、エーテル自身のうちには諸々の形・力・原理に関して地球上に見いだされるあらゆるものの全母型も存していることになる。大宇宙のうちには原写像として小宇宙が存している。「天上と地上は同じよう」という神秘学の古い法則は、πという数に結び付けられて、有効となる。

アーノルト・ゾムマーフェルト教授によれば、数学的振り子には次の式が妥当する。

$$T = 2\pi \sqrt{\frac{l}{g}} \left(1 + \frac{1}{4} \sin^2 \frac{\alpha}{2} + \frac{9}{64} \sin^4 \frac{\alpha}{2} + \dots \right)$$

T=振動周期, π=定数 3.14, l=振り子の長さ, g=重力加速度, α=振り子の振れ角

われわれはこの数学的振り子の等式を利用できるが、それは振り子の質量が小さいため、慣性モーメントは無視してよいからである。振り子の振れ角が10°を越えなければ、サイン関数のついた項は無視できるが、10°より大きくなると、サイン関数は考慮されなくてはならない。調査場所によって重力加速度gは一定であるが、それは振り子探知者によって振り子の長さが一定であるのに似ている。この等式から振動周期は振れ角の関数として得られるわけである。

オランダのライデン大学の生理学物理学研究所でトロムプ教授が行った実験は、振り子が磁場によって——電流によっても磁場によっても——影響を受けることをはっきりと証明した、馬蹄形磁石の南極に振り子を近付けると、ある偏差が得られたが、そのさい磁石を振り子探知者の手の動脈上にあてておくと、実験は特にうまくいった。これはつまり、すでにカルダンが確認していたように、赤血球は等張性の砂糖水の中では均等磁場の南極に向かって動くからである。カルダンは子牛の血液でその実験をしたのである。

振り子が宙につるされていて、敏感な人の手にない場合は、いかなる効果も観察できなかった。振り子探知者の手が初めて数学的振り子を占い振り子にするのである。ローレンツの次の等式は科学的根拠を提供して、電磁場が1つの電子におよぼす力を記述している。

マイナス記号のついた制動放射は、電磁場に作用する振り子探知者の電子の力を示している。制動放射は同時に振り子にも作用しているが、それは振り子が敏感な人の身

$$m \frac{d\vec{v}}{dt} = e\vec{E} + \frac{e}{c} (\vec{v}\vec{H}) - \frac{2e^2}{3c^3} \cdot \ddot{\vec{v}}$$

m = 電子の質量, v = 電子の速度, t = 時間, e = 電子の電荷, E = 電場の強さ, H = 磁場の強さ,
 c = 光速

電子は振り子探知者の身体の中にある。この等式の左辺 $m \frac{d\vec{v}}{dt}$ は力を表しており、等号の右辺には3つの力、つまり $e\vec{E}$ で電気的力、 $\frac{e}{c} (\vec{v}\vec{H})$ で磁気的力、それにいわゆる制動放射 $-\frac{2e^2}{3c^3} \cdot \ddot{\vec{v}}$ の3つの力が記されている。

体にあるためである。振り子探知者の筋緊張と神経緊張は、振り子に直接作用する。こうした緊張の高まりは、心臓の加速された活動を呼び起こし、かくして血液循環の加速をも引き起す。しかし血液の中には、すべて負の電荷をもっている赤血球がある。血液循環が速くなると、いっしょに運ばれる赤血球とその電子の速さも高まり、そのさい新しい電流が発生し、さらに外部の電磁場も赤血球の電子に作用をおよぼす。

ところで、敏感な人の筋緊張と神経緊張の高まりによって呼び起こされたこれらの電流が、振り子に作用をおよぼすわけだが、そのさい振り子探知者の身体は外部の弱電流のいわば增幅器と見なされ、振り子は上記のすべての電流の指示器と見なすことができる。

振り子探知は敏感な人にどんな影響を与えるのか、それを特に示すのは、数回実験をすると、振り子探知者に疲労現象が現れるという事実である。つまり、振り子探知のさいには、生体は酷使されるわけである。実験中測定した結果、外部の電気的・磁気的刺激は実験継続中変化がないことがわかったのである。

振り子探知に働くもうひとつの力——アルフヴェーン波——

このようにして振り子探知の現象は説明されうるとはいえ、何人かの研究者たちはさらに別の力を想定しており、この力が振り子探知で働くのだとしている。その力も同じように科学的説明を受けている。ここで問題となっているのは、1942年に発見された分極化した電磁波で、それを発見したスウェーデンの物理学者ハンネス・フォン・アルフヴェーンにちなんで、アルフヴェーン波と名づけられたものである。これらの波は電気伝導性をもつ液体の中を種々の方向に伝播してゆく。それについて『RGS』誌第129号(297ページ)にこう書かれている。

「液体の中での磁場の力線はしばしばその液の流体力学的力の力線と平行に走る。液圧を変えると液の流体力学的力線と磁力線の距離が変わる。液体の磁気ポテンシャルが変わると、新しいアルフヴェーン波が生じる。」

アルフヴェーン波は人間の血清の中にも見いだされた。血清中のアルフヴェーン波の磁気ポテンシャルは、赤血球の電磁ポテンシャルと相互作用の関係に立っている。この事実はチゼフスキイ教授が立証した。このようにして、血液の中ではアルフヴェーン波のエネルギーと赤血球の電子エネルギーとの間に平衡関係が成立している。アルフヴェーン波は人体の中では他の要因、例えば神経系の磁気ポテンシャルに影響を与えるような薬剤によっても、誘発させことがある。この事実は磁気化学的研究が証明してくれている」

アルフヴェーン波は実際人体のあらゆる組織の中を伝播して行くから、敏感な人の指を介して振り子にも伝達される——しかも赤血球の電子に直接作用をおよぼしていた外部の電磁場を同時に刺激するのである。外部の刺激は生体内である意味で修正され、強化され、それから振り子へ伝達されるので、振り子に対する外部の刺激の直接的影響は全く生じないか、取るに足らぬ意味しかもたいないといったこともありうるわけである。そのほか、やはり興味深いといえることは、磁場は脊椎動物の前脳に直接ある作用をおよぼすことが、ロシアの生理学者コロドフにより観察されたことである。上記『RGS』誌の論文では、振り子の測定結果の統一化に関する注記の中で、こう書かれている。

「振り子自身の場が結果に影響を与えるのを避けるためには、振り子は強磁性や反磁性の物質、例えば、鉄・ニッケル・コバルト・マンガンなどから作るべきではなかろう」、というのは、振り子は磁場の外ではいかなる磁気的性質も示してはならないからである。この見解に対しては、多くの放射感知者たちはもちろん激しく異論を唱えるであろう。

さしあたり科学的に異論のない事実は、少なくともすべての有機物質と生物は放射線を出していることだ。生きているどんな細胞でも、細胞核と細胞膜の間には、ある電気的双極子が形成されている。この電磁放射は占い振り子によっても測定できるし、オーラ写真、つまりキルリアン写真によっても、肉眼で見えるようにすることができる。

地球放射線は防げるか？（ウォルフ・エッガー）

放射感知者に対しては次のような質問がよく出される。「鉛は遮蔽するとお思いでしようか？」「アルミニウムはいわゆる地球放射線を防いでくれますか？」あるいは「私のベッドの下には鉛箔が1枚ある、だからベッドは遮蔽されている」と言う者がいるかと思うと、1人の老人は最後にこう言った——「わしゃあ、ベッドの下に古釘の入った小箱を置いとくで、わしにゃあ何も起こりっこねえでさあ」。

この問題について1度書かねばならぬ時がきた。これらの手段のどれも放射線を弱める働きはもっていない。逆である！これら2つの金属には生命破壊の作用があることは、植物実験で示されている。その上、鉛は崩壊産物であり、したがって放射体、しかも生命に非常に敵対的な放射体なのだ。

室内観賞植物を1つ選んで、その本性に合った場所に置いてください。太陽光線を好むものには直射日光を当て、嫌うものには陽光を当てないで置くわけです。占い棒か振り子を上のほうか横のほうからその植物に近付けると、植物から出るオーラの限界のところで振動が得られる。植物が生命力旺盛だと、あなたは少なくとも1番上の葉の先端から50cm上にオーラがあると推定するだろう。植木鉢の下に鉛箔を置くと、オーラは完全に消えないまでも、ずっと小さくなってしまうであろう。同じことはアルミニウムでも経験できる。これら2つの金属はそれゆえ植物にとっては生命を脅かす作用をもっている。鉄によってもオーラはひどく小さくなる。したがって鉄も鉄に敵対的な人間に思わしくない作用を与える。

さて、これらの金属の「放射防護」のことを述べよう。あなたの住まいの中で水道

の1つに紙テープかチョークで印をつけてください。こうして照射された表面の上に鉛箔かアルミ箔か一片の薄い鉄板を置いてください。もしこれらの金属表面の上で振り子か占い棒の振れが得られれば、防護効果など問題になりえないわけである。あなたはこれらの金属でかえって自分の身のまわりの世界に別の敵を作り出しているにすぎないので。麦わらの入った袋を水道の上に置くときは別である。麦わらの上だと占い棒の振れは止む。ここでは遮蔽ではないとしても、放射線を大いに和らげる作用を語ることはできる。それゆえ、あなたが水道に沿って袋の前と後で振れを得、袋の上で振れを得ないなら、これはまあ成功した実験だと私は見る。

ところで鉛はレントゲン線に対する放射線防護装置なのだろうか？ 鉛の前掛けを掛けている医者は誰でも自分でこれで検査できるはずだ。ガイガーチェンジャー管を鉛の前掛けの後ろに差し込んでみればよいからだ。多分ガイガーチェンジャー管は、鉛の前掛けの前でも後ろでも全く同じように鳴るであろう。残念ながら、ガイガーチェンジャー管はほとんど使われていないのである。どんな医者でも、腕時計や、いつも身につけて持ち歩いている二次的放射体となった鍵の束や、患者がポケットに入れている折りたたみナイフや、その他の金属品がもっている、生命を脅かす影響を検査するために、ガイガーチェンジャー管は持っていないなければならないはずなのに持っている医者は少ない。

ガイガーチェンジャー管は鉛の前掛けがどんなに疑問となりうるかを証明して、多くの人たちが当惑することになるだろう。なぜなら、買収のきかないガイガーチェンジャー管がそれを実際に証明しているからである。新しい前掛けは防護してくれるかもしれないが、しかし一種の満足が得られているからには、そのことはまさに疑わしくなる。

私はしかしガイガーチェンジャー管さえ信じていない複数のサークルに出合ったことがある。そうした人たちには、つける薬がない。スイスからの報道によれば、1分あたり8から20パルスの振れは自然的なもので、有害なものではないという。当時は要注意の境界線は約150パルスだった。だが生体に対する放射線の許容量はすでにしばしば下げられたということに注意を促してもよい。許容量と言っても相対的なのだ。

敏感な人にとっては18パルスが30パルスに上がるだけですでに害となりうるのに、鈍感な人だとまだ何も影響を受けずにいられるかもしれないのだ。私の考えでは、教授のヨハネス・ウーデ博士だけが正しい。彼はかつてこう言ったのだ——「放射能で有害でないのは、0値のときだけである」と。まさに金言であるが、等閑に付されていて残念である。

われわれを支配している「電場」(ヴァルター・ラムメイト)

電場ということで理解されるべきことは、電荷をもった物体はどれも1つの空間、つまり1つの「場」に囲まれていて、その中では電荷をもった他の物体へ時間的に一様な機械的な力の影響が及ぼされるということである。地球は電荷をもった1つの巨大な球である。地球はその周囲に1つの電場、いわゆる勢力範囲を生み出している。この電場は地球の近くでは地表に順応している。谷や盆地では電場は低く、山や高原では高くなっている。場の強さの等高線は平地では地面に平行に走っている。場の強さは、低地では高度が1m違うごとに例えれば120Vになり、高原や山の上では200Vで、高

度差によってはそれ以上になる。電場はその勢力範囲内にある電荷をもったすべての粒子、それゆえ電子やイオンに作用を及ぼす。ただ、イオンだけが生物にとってはより大きな意義をもっている。それは、われわれを取り巻いている大気も身体自身も一定のイオンを分け前として含んでいるからである。力の作用は電場の強さに平行している。だから、より高い電場ではイオンに働く力の作用はより大きくなる、すなわち、より多くのイオンが影響を受ける、というよりむしろ移動させられる。この移動は身体自身にいわば固有の分子とそうでない外的分子との自然的分裂を結果する。しかし、生物体が生きている間は、解体の後には再建、新しい生産が続く。古い解体された分子の代わりを、生まれたばかりで循環の中へ送り出された若々しい分子がするのである。毒・バクテリア・ウイルスなどの身体自身のものではない外的分子も、電場によって同じような解体に服すが、有機体のような新しい生産の可能性が欠けているので、これはそれらの壊滅に等しいことになる。

こうした理由からして、人間は高い電場のうちに最も有利な生存条件を見いだすということが——力の場は原則的にわれわれの五感では知覚できないとはいえ——理解されるのである。とはいえ、いかなる場合でも生命事象の経過は電場によって影響を受けるのである。この事象は生体の活動や養分摂取には依存しておらず、ただ電場の存在によってのみ制約されている。電場が0に等しくなると、この生命事象の経過は止み、じきに代謝は停止することが結果する。実地実験では、すでに2、3分後には急激な発汗、動悸、目まいの発生が見られた。有效地に働いている電場の強さの突然の変化は、例え視神經において1番簡単に知覚できるような、不意の反射を引き起こす。ところで占い棒の振れとか天気の変化に対する敏感さの原因として認められた場の強さの変化は、非常にわずかの変化だけで十分なのである。変位する場が身体に当たると、いつでも身体中のイオンの移動を妨げ、循環を害する働きをする。こうした波動の発生源は雷雨や放射線や宇宙内のさまざまなものを見源としている。人々はこの種の波動をすでに人工的に発生させ、その作用をテストしてきた。その際、被験者には頭痛、呼吸困難、おっくうなけだるい感じ、無気力、循環障害、そしてついには肝臓疾患が現れることが明らかになった。そのため、今日では人体についてこうした実験をすることは、見合わされている。

地表近くの場の強さは、一部はまだ解明されていない多くの周期的変動に支配されている。1日の経過の中では、午前1時から4時までが最低値である。この時間に危機や死亡が1番よく起こることが指摘される。頂点は午前の時間にあり、そのとき人間は最も能率がよい。12時過ぎに第2の弱い低点があって、正午の疲れでわれわれはそれに気付くのである。1日の最高値に達するのは、18時と20時の間の晩の時間である。場の強さの値は概して冬が高く、それでこの季節には多くの人に正午の疲れがなくなるのである。これまでの観測では、満月のときには場の力が高まるこども示されている。満月を過ぎると場の力は再び減少し、新月のときには最低値となる。月の影響力は生命力が強くなるとか、体のさわりが少なくなるとか、眠れなくなるとか、他の似たような形で現れるわけだが、それはこれによって1つの説得力のある解釈を見いだす。一般に場の最高の強さは1月に現れ、7、8月には最低値をとる。夏の気温上昇は導電率が高まることによって場の強さが減少することを意味し、場の強さは湿度によっても左右されるのである。

第2のたいそう重要な、しかし五感では知覚できない気象要因を示すのが、放射線である。この放射線の60~70%は地球放射線に帰せられ、残りは宇宙放射線、つまり宇宙線に帰せられる。最近これらの放射線の中に地球内部の深さとともに増える中性子線が立証されたので、人々はその中に、地球放射線はその原因をまだ原子ガスに似た地核のうちにもっていることの証明を見ている。放射線は地面からの高さとともに1500mぐらいまで減少して行き、その後は再び増大するが、それは今度は上からやって来る宇宙線が優勢となるからである。放射線によって分子は無差別にイオン化されるが、破壊されさえする。われわれの体内分子のこの種の機械的破壊は、われわれの健康状態を高めることはありえない。なぜなら、身体はそうした廃棄物によって著しく苦しめられるからである。放射線が1番少ないところ、例えば大洋上とか標高2000mまでの高原では健康状態は最良で、病気にかかる率が最低であることは、統計が示しているところである。生物の老化過程の原因は放射線に帰せられるという見方をしている研究者もいる。いずれにせよ、身体は破壊された分子を取り除き、新しい分子と交替させなくてはならない。それゆえ、放射線というものは、循環が破壊された分子を運び出す状態には、いつでも有機体にとって危険なものであることを意味している。こうして発生するのが、恒常的負荷を作り出し多くの病気の原因となりうる「病巣」ないしは蛋白質性毒素である。

地面の近くでは放射線はより強い変動を受ける。土壤のすべての物質は放射能をもっているが、砂地や広々とした水、つまり海は最少の放射能しかもっていない。地下水脈は強い放射能をもっていることがあり、それらが結合しているときに地表での「刺激帯」が語られるのである。そうした異論の余地なく立証できる刺激帯の上では、破壊的放射線が普通よりも強い。放射線は大気をも強くイオン化するから、この流域の上では空気の導電率が高くなり、導電率が高くなると電場の強さの低下が生じる。これによって地下水脈の上では生物の健康にとって不利な条件が2つ与えられることになる。つまり、放射線による身体分子の破壊の増大に加えて、電場が弱くなることによって身体分子の交換、あるいはむしろ身体分子の自然的解体の減少が生じる。それによってここ刺激帯の上では身体が病気になりやすいことが二重の根拠から強く現れてくるのは、納得のいくことである。

放射線は分子と原子を破壊する。かくて、放射能がなければ正常な生命過程のうちで非常に長く、もしかすると永続的に、保存されている分子も破壊される。放射線は例えば生殖不能へ導く。老化の原因も、すでに言及したように、放射線に帰せられる。事情によっては、身体が運び出し、新たに作り出すことができるよりも多くの分子が破壊される。こうした有害な影響に対する防護は、不可能ではないにしても、むずかしい。重要なことは放射能のある水脈や地域を避けることである。「刺激帯」を突き止めるということは最重要課題を意味している。家がまさにそうした危険な刺激帯の上に建っていて、そのためにこれらの家に生じる不気味な多数の症例と死亡が自然的な説明を見いだすことは、全く可能なのである。身体機能の調査から明らかになったことは、人間が最も健康で仕事の能率が1番上るのは、放射線が1番弱いところ、例えば高地とか水面近くとか砂地のある地域のような場所なのである。そうした地域の上では電場の強さも最高で、しかも生物学的に最も身体によいので、生命はこ

こでは二重の観点において健康である。大都市のうちでは例えばベルリンは最高の場の地強さをもち、放射線は最少で、それゆえ生活条件は1番健康的である。その原因は周辺が砂地であることに帰せられよう。

放射能地帯の上では、偶然の度を越して、癌が発生している。放射線の「遮蔽」など実際は不可能であるが、強いて遮蔽しようとするならひとは上にも下にも分厚い鉛の覆いを置いて自分を防護しなくてはならないだろう。しかしそうすると身体にきわめて大切な電場が欠けてしまうだろう。だからわれわれは、動物の行動が示すように、放射活性の地下を避けるか、それでもまだ避け切れない有害な作用はできるだけ高い電場によって均すという仕方で弱めるよう、指示されているのである。あらゆる種類の物体の内部ばかりでなく、家の中においても、何もない広々としたところに対してみれば、非常に弱められた場の強さが支配している。家の中の場の強さは、使用されている建築材料の種類に依存している。場の強さが最も高い——それゆえ1番有利な——のは木造家屋で、最低なのは鉄筋コンクリートないしは金属の建物である。われわれの祖先は、何もない広々としたところでの生活が1番恵まれた有利なものであることを知っていた、——たとえその際電気的力の場のことは多分ほとんど考えなかつたとしても本能的に知っていた。——残念ながらどんな建築材料も、それがわれわれに果たしてくれる貴重な貢献とならんと、大切な自然の電場を弱める性質をもっている。建築材料の中では電場の強さは多かれ少なかれ崩壊する。鉄筋コンクリートの家畜小屋が建ち始めた1910年頃から、飼っている牛・豚・家禽が病気の著しい増加を示していることを、ある農業の観察が明らかにしている。

この神秘的な力が0か0に等しいところ、例えば地下の洞窟内のようなところには、人間も他の高等生物も生存していない。似たような事情は、例えばアンデスとかヒマラヤといった高い山脈にも見いだされる。ここでは時折、極地方よりも気温が高くなることがあるがそれでも生物は何も存在しない。他方、極地方では見たところ同じ条件下なのに生命が存在している。高山では酸素が少なすぎるからだと反論するかもしれない。しかしそう反論する者には、多くの実験や、とりわけ極度の高さまで酸素吸入器なしで歩いて登ったアンデスやヒマラヤ研究者たちのすべての経験が対立することになる。酸素の乏しい空気の影響といったものは呼吸を速くすることによって調整できるからだ。電場の強さが0に近いところでの類似の現象は、地下鉱山・潜水艦・鉄筋コンクリート製の要塞の中にも見られる。こういったところでは人間は絶えず力が抜け疲れた、食欲のない感じがする。かなり長時間鉄筋コンクリートの建物のなかに留まっていると、放射線も電場も弱まってしまっている。前者はわれわれの身体に有利だが、後者は不利である。しかし、場の強さが減少するという形での不利要因のほうが重要である。こうして、われわれは疲れ、気乗りがしなくなり、かなり長時間鉄筋コンクリートの室内に留まっていると、非常にさまざまの身体的故障や伝染病にかかりやすくなる。これと似たようなことは、登山家たちが南米のアンデスやヒマラヤで観察している。すなわち、高度も同じで、気象条件も変わらないのに、2つの山の間にやって来たとき、人間も動物も「高山病」にかかり、無力になって倒れてしまった。電場の強さが弱まっていたのが原因だったのである。

高電場の地域——つまり高地・砂地・海——の上では疫病や伝染病がきわめて稀である

ことを、いろいろの統計や観察や報告が立証している。例えば南アフリカやエチオピアのようなところでは、恐れられている熱帯病は見いだされず、そうした病気はただ川の谷間や低湿地だけに発生している。中部ヨーロッパではシュヴァーベン高地とヴェルテムベルク——ホーエンツォルンが伝染病の1番少ない地方であるが、ここは大部分が高原である。アルプス地方でよく知られているフェーン風症は主として低湿地と谷間で発生する。アルプス地方に多い甲状腺の病気についてさえ、その病気が犠牲を捜すのは谷間や低湿地だということが知られている。

かくて電場の強さは、周囲の世界に存在している他のどんな要因よりも、人間の健康・能率・年齢に影響を及ぼしていることが、証明できるのだ。文明人が閉じられた空間にはとんど間断なく留まることによって自然の電場から遮断されいてる状態、無線送信器の絶えざる影響は、ただ人工的な電場を使ってのみ相殺ないしは清算されるしかない。この人工の電場の使用という道の上には、循環障害の止め難い進行と、循環障害に関連しているすべての脅威的結果を阻止するという、重要な可能性も存しているのである。